様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２０８５１

研究課題名（和文）縄文土器文様を奏でる：考古学と音楽教育の協同による新感覚体験学習プログラムの創出

研究課題名（英文）Creation of a new learning program of music making use of Jomon pottery patterns through collaboration between archaeology and music education

研究代表者
中村　耕作（Nakamura, Kousaku）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：３０５４８３９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：〈縄文土器に触れ・感じて音楽づくりを行う〉という新たな体験学習プログラムの開発を目指して活動を続けてきた。実物の縄文土器を観察しその特徴や印象をグループ内で共有した上で、木の実・豆・骨・貝・石など縄文時代に存在した自然素材を用いて短い音楽づくりを行う。期間内に小学校音楽科、中学校総合的学習の時間、地域博物館、公民館など様々な種類の場での実践を通じて、様々な専門家が連携し、地域の資源を活用するためのノウハウを得ることが出来、最終的には代表者・分担者以外の研究者や学校教員が主体的にプログラムを進める段階まで発展し、家庭科や体育科（表現運動）の授業とも連携した総合的な学習を実践することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文化財の保全・活用が重要な課題となっている中、本研究は、地域博物館がもつ歴史的資料を、歴史学習を越えた創造的な活動につなげるための手法として開発を進めているものである。小学校６年生で「縄文」を学習していなくとも、数千年前に使われた地元の土器のもつ不思議な形・文様は想像力・創造力を刺激する。異文化に思いをはせるとともに、それをグループ内で共有し、その特徴を自分たちで整理し、新たな音をつなげて作品化するプロセスは、今日に求められる協働的・創造的な力を養うものであり、そこでの歴史資料の活用という新たな可能性を切り拓く意義がある。博物館・学校・専門家による新たな連携の意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：A new experiential learning program was developed in which participants could "touch and feel Jomon pottery and make music with it. First, participants observed actual Jomon pottery and shared their impressions of its characteristics with the group. Then, they will make short pieces of music using natural materials that existed in the Jomon period, such as nuts, beans, bones, shells, and stones. During the period, various experts collaborated through practice in various types of settings, including elementary school music classes, junior high school integrated learning hours, local museums, and community centers. This enabled them to gain expertise in utilizing local resources. Eventually, the program developed to the stage where school teachers took the initiative in promoting the program, and they were able to implement comprehensive learning that was also linked to home economics and expressive movement classes.

研究分野：考古学・博物館学

キーワード：博物館資源　地域学習　考古学教育　音楽づくり　創作　博学連携　大学地域連携　社会教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

教育の現場では Society5.0 社会の到来に向けて、協働的・創造的な人材養成が求められている。一方、相次ぐ自然災害の中で地域の基盤としての文化財の重要性が高まっている。両者は無関係のものではなく、創造性の基点として、先人から継承した文化財を位置付けることが重要である。こうした中で、2018 年の文化財保護法・2022 年の博物館法の改正によって文化財・歴史的資料を文化振興のために活用する方向性が示されてきた。文化財の新たな活用による価値の付加は、文化財の保存・継承意識を周知する上でも必要性が高い。既に、考古資料については、「アート＆アーケオロジー」を標榜した公立博物館やアーティストグループによる展覧会・イベント・市場流通が増加している。しかし、その多くはアーティスト作品が中心であること、表現方法としてはモノづくりや絵画・文章であること、という特徴がある。

こうした状況をふまえ、國學院大學栃木短期大学（研究分担者勤務校、研究代表者は 2021 年度まで勤務）では、上記の現状をふまえ、。従来から実施してきた地域連携を拡充し、2016 年度の栃木市中根八幡遺跡の発掘調査にあたり発掘調査体験に加えて、新たな取り組みとして土器文様を音に置き換えるプログラムを試行することとした。考古資料そのもの観察にもとづいた、児童・市民参加による、音楽・身体パフォーマンスなどの無形の作品づくりという新たなプログラムの開発を目指し、その後栃木市内の小学校や下野市内の中学校などで実践を重ねてきた。しかし、実践を通じて運用上の課題や理論的基盤の必要性が高まってきた。そこで、外部研究者の助言を得て内容を充実させ、また広範な教育の中で本プログラムの位置づけを明瞭化して、一般化を図るため、本研究の構想に至った。

２．研究の目的

本研究は、縄文時代・縄文土器に関する考古学の成果と、音楽教育における「音楽づくり（創作）」の方法をコラボレーションすることで、歴史教育・音楽教育双方に有効な「縄文土器文様のパターンを音楽で表現する」という新たな体験プログラムを内容的・理論的に高度化し、一般化することを目的とする。本研究では音楽教育の専門家や学校教員・博物館学芸員などの外部研究者と協力しながら内容の高度化を図る。本研究は、考古学×音楽教育、大学・博物館×小中学校という異分野のコラボレーションによって、考古学学習、音楽学習、異文化理解、大学教育の高度化、大学・博物館と学校との連携などの要素を含んだ新たな教育プログラムを生み出すという意義を有する。

３．研究の方法

申請段階での試行プログラムには、①音楽としての完成度や学習成果（教育効果）の測定といった運用・技術上の課題や、②縄文土器と音楽の組み合わせの意義といった理論的な課題が存在した。そこで、本研究では、学校・博物館の協力を得て、様々な枠組みでワークショップを実施し、音楽教育や学校・博物館・社会教育の立場からの助言・検討を含めた実践内容の高度化を図る。また、文献調査や遺跡公園などで実施されている類似イベントの現地調査を通じて、共通性・差異性、教育効果の測定方法を検討し本実践の独自性や有効性を明らかにする。

このワークショップの目標については、申請当初は、歴史学習と音楽学習の双方に有効なものを目指していたが、研究期間中の実践と外部指導者等からの助言により、より高次の目的として、協働性・創造性を育むこと、地元資料を起点に文化遺産への理解を深めることを設定するに至った。縄文土器は、通常歴史資料と考えられているが、このプログラムでは歴史的意義や製作技術・用途を理解した上で、グループで協働しながら自分たちなりの新たな音楽作品を創造する源泉と位置づける。歴史学習で習得すべき比較・因果関係という「歴史的な考え方」（中学校学習指導要領解説）、自分たちの暮らす地域の過去を知るという地域学習、調理具に様々な器形・装飾を施すという現代とは異なる文化のことを考えるという異文化理解、そして表現のための技能の習得を目指す。

４．研究の成果

（１）開催したワークショップ一覧

2020 年度

【ワークショップ評価策定のためのワークショップ】

11 月 24 日。科研費挑戦的研究（萌芽）「博物館の新たな在り方を模索するための体験学習・ワークショップ評価の構築」（代表者：鳥谷真佐子）と連携して実施。博物館ワークショップの評価手法を検討するためのワークショップを、本プログラムを対象ととしてオンラインで実施した。具体的な評価規準を策定するには至らなかったが、この時点での最も重要な目的を意識化した。

【兵庫県尼崎市立下坂部小学校音楽科】

「縄文土器・弥生土器の文様をもとに音楽をつくろう」

12 月 18 日。6 年生 2 クラス各 4 班計 59 名。担当：太田裕子教諭。土器借用・ゲストティーチャー：尼崎市歴史博物館（高梨政大・新里遥）。指導助言：牧野淳子（京都橘大学非常勤講師・関

西音楽教育研究会代表)。土器借用協力：國學院大學栃木学園参考館。
　事前に太田教諭によって音楽の構造や土器施文体験をおこない、当日は博物館学芸員による周辺の遺跡についての説明（尼崎市域は縄文時代には海の底であり使用可能な土器は所蔵されていない）の後、國學院大學栃木学園所蔵の北関東の縄文土器と尼崎市立歴史博物館所蔵の弥生土器を使用して音楽づくりを行った。全体で弥生土器を用いてやり方を確認した後、縄文土器の展開写真をもとに文様構造と音楽の構造を結び付け、それに沿った音楽作品となったが、土器の文様帯に相当するパートの重ね方・繰り返し方などは班の独自性が現れた。地元資料をつかい、身近に遺跡のあることを学べたという点で評価された一方、基本的には土器文様を音素材でなぞるのみとなっており独創性に欠けるとの批判もいただいた。
2021 年度
【埼玉県春日部市郷土資料館体験講座】
「縄文文化をもとにした音楽づくり＃dokidoki おんがく作り♪」
8 月 21 日（150 分)。6 年生 2 名・保護者 2 名＋博物館実習生 10 名。担当：實松幸男館長・鬼塚知典学芸員。指導助言：石上則子（元東京学芸大学准教授)。
　はじめに資料館展示室内の竪穴住居復元を前に学芸員による縄文時代のくらしについての説明を行い、次いで館蔵の市内出土の縄文中期土器を観察し、施文体験をおこなった。さらに、文様の特徴をもとに自然素材で音楽づくりを行った。音楽の構造を事前に強調しない方法として、気になった文様を自由に構成することとした。コロナ禍ということもあり参加者は少数にとどまったが、博物館を会場とし、館蔵資料を用いた初めての実践となった。単に土器の観察に留まらず竪穴住居での生活を想像した上での音楽づくりとすることができた一方、音楽づくりの方法については課題が残された。
【蓮田市立平野中学校ふれあい講座】
「縄文から今、そして未来へ－創造性と表現力の拡大を目指した生き方への挑戦－」
11 月 26 日（90 分)。全校 89 名。担当：吉里達哉校長。土器借用・ゲストティーチャー：蓮田市教育委員会社会教育課（小林美穂)。
　特別活動の一環としてのキャリア教育の講演会として実施。中村・早川・小林のキャリアについて講演したのち、新たな挑戦の一例として、蓮田市出土の縄文時代中期土器を用いて音楽づくりを行った。土器は実物を観察した後、GIGA スクール端末の活用した 3D データと写真を用いた。多人数のため個々の班の指導や発表を十分に出来なかったが、中学生ということもあり構成が工夫された作品が多くみられた。
【國學院大學栃木短期大学人間教育学科子ども教育フィールド】
「考古学と音楽の連携」
11 月 4 日（90 分)。短大生 7 名。音楽：早川冨美子、考古学：中村耕作。土器借用協力：國學院大學栃木学園参考館（髙垣美菜子)。
　幼稚園・小学校教員の養成課程における「教科教育法　音楽」の時間に、他教科との連携という内容で、土器と音楽の連携授業をおこなった。
【栃木市寺尾公民館＋星野遺跡】
「＃dokidoki おんがくづくり♫～縄文をもとに音楽をつくろう～」
11 月 27 日（150 分)。小学生 8 名・保護者 6 名。担当：福富浩子（栃木市地域政策課寺尾公民館)、鈴木廣志・永田陽一（栃木市地域政策課栃木公民館係)。記念館見学協力：栃木市教育委員会文化課。土器借用協力：國學院大學栃木学園参考館（髙垣美菜子)。サポート：國學院大學栃木短期大学子ども教育フィールド学生 2 名。
　まず栃木市指定史跡星野遺跡の復原竪穴住居を背景に縄文風衣装で記念撮影し、記念館で出土した土器を見学した。初めての遺跡現地での実施となったが季節的に屋外での活動はできないため音楽づくりは近くの公民館を会場として行った。公民館主催として初めての開催でもあり、家族での参加が目立った。低学年児童も参加したが、保護者がリードして、土器の文様構成に沿いつつも多様な作品が生まれた。
【國學院大學栃木中学校総合的な学習の時間】
「縄文土器の文様から新しい音楽を創ろう」
1 月 18 日(100 分)。3 年生 52 名(但しコロナ禍による学級閉鎖と欠席者のため実参加者 19 名)。担当：青木一男校長。土器借用協力：國學院大學栃木学園参考館（髙垣美菜子)。
　例年実施されている同校の日本文化の理解・発信の教育の一環としての短期大学日本文化学科教員による講演の枠を用い、縄文文化の理解と新たな創造を目的に実施した。
　前回実践の後、都留覚（國學院大學栃木短期大学人間教育学科准教授）より、主体的・協働的な学びという、より高次の目的を示唆され、本実践より到達目標に加えることとし、この点については概ね達成されたが、現代において縄文土器を用いる理由付けなど授業意図についての不明瞭性についての指摘も得た。
2022 年度
【春日部市郷土資料館体験講座】
「縄文文化をもとにした音楽づくり＃dokidoki 音楽づくり♪」
8 月 7 日（150 分)。対象：4～6 年生（4 年生 8 名＋保護者 7 名・1～2 年生 3 名＋博物館実習生 5 名)。担当：實松幸男館長。指導助言：永岡和香子（浜松学院大学短期大学部教授)。
　募集対象を 4 年生以上に変更し、4 年生とその弟妹・保護者が参加した。気になった文様の写

真を切り抜き、模造紙上に配置してオリジナルな文様構成をつくり、それを音楽で表現するという方法をとった。また、長岡氏の助言で、身体を動かして表現することも取り入れた。
【キョクトウとちぎ蔵の街楽習館（栃木市市民交流センター）講座】
「〈縄文×音楽〉DOKI DOKI　ワークショップ」
8 月 25 日（180 分）。栃木高校社会部・史学部 10 名・栃木翔南高校ダンス部 11 名。担当：永田陽一（栃木市地域政策課栃木公民館係　社会教育主事）・鈴木廣志（栃木市地域政策課栃木公民館係　社会教育指導員）。指導助言：中尾智行（文化庁博物館支援調査官）・橋口豊（横浜市歴史博物館学芸員）。サポート：石井ゆきこ（東京都港区芝小学校主任教諭）。土器使用支援：高垣美菜子（國學院大學栃木学園参考館）。土器借用協力：國學院大學栃木学園参考館・栃木県埋蔵文化財センター。
　学校・公民館だけではできない専門家を加えた創造的な事業として、公募ではなく公民館側から２つの部活動に声がけをして実施した。栃木県埋蔵文化財センターの貸出用土器も利用している。本研究の意図・これまでの試行についても伝え、高校生ならではの作品づくりを要請した。それぞれ印象に残った部位を中心に、土器文様の分析・表現とも小中学生には無い高度な作品が仕上がった。個々の形態・文様だけでなく、「曲調」に相当する土器全体の雰囲気を認識する必要性や、社会教育の場でも「ここで何が学べるのか」を明確に打ち出していく必要性が指摘された。なお、当日の様子は NHK 宇都宮放送局の夕方のニュース番組（とちぎ 630）で放映された。
【蓮田市中央公民館＋文化財保護担当（文化財展示館）】
「市制 50 周年記念事業子ども講座　みて、さわって、つくろう、縄文 dokidoki 音楽づくり」
11 月 26 日（180 分）。小学生 7 名（1～5 年生）＋保護者 7 名。横山りつ子（中央公民館）・小林美穂（文化財保護担当）。指導助言：近藤真子（文教大学准教授）。サポート：石井ゆきこ（東京都港区芝小学校主任教諭）。
　中央公民館と文化財保護担当との共催で、蓮田市の縄文文化を代表する縄文時代前期の国史跡黒浜貝塚と隣接する市役所会議室を会場とした。まず、黒浜貝塚・文化財展示館で遺跡や自然素材を用いて音あそびを体験した。その後、蓮田市役所に会場を移動して音楽づくりをおこなった。観察する土器については、従来、立体的な形態・文様をもつ縄文時代中期のものを用いていたが、今回はこれに加えて蓮田市の前期土器を使用することとし、前回の指摘をふまえて両者の雰囲気の違いの比較に重点をおいた構成とした。
【國學院大學栃木短期大学人間教育学科子ども教育フィールド】
12 月 20 日（90 分）。短大生 19 名。
2023 年度
【國學院大學栃木短期大学人間文化学科夏の公開講座】
「みて、さわって、つくろう！縄文土器 DOKI 音楽づくり」
7 月 24 日（150 分）。小学生 9 名＋保護者 5 名。サポート：國學院大學栃木短期大学生 4 名。
土器借用協力：國學院大學栃木短期学園参考館。
　國學院大學栃木短期大学による夏休みの子ども向け講座の１枠として実施した。中期の土器と晩期の土器を比較し、音楽づくりを行った。
【中根八幡遺跡　縄文まつり】
8 月 27 日（1 日）。幼稚園児、小学生、中学生、高校生、地域の方々など一般来場者。サポート：國學院大學栃木短期大学生 4 名。
　縄文まつりに参加した地域の方を対象に、土器にふれる、自然素材にふれる、縄文風衣装の着用体験、サポート学生と一緒に自然素材で即興的に音楽づくりをおこなった。
【春日部市郷土資料館体験講座】
「縄文文化をもとにした音楽づくり♯dokidoki 音楽づくり♪」
8 月 12 日（150 分）。小学生 6 名＋保護者 5 名＋博物館実習生 5 名。担当：實松幸男館長・鬼塚知典学芸員。サポート：國學院大學栃木短期大学生 2 名、卒業生１名。指導助言：高倉弘光（筑波大学附属小学校教諭）、小野塚航一（国立歴史民俗博物館特任准教授）。
　３年目の今回は、土器を音楽にするための方法やグループで音楽づくりをするための事前のアイスブレイクに時間をかけたこと、従来の縄文時代中期の土器に加えて縄文時代後期の別様式の土器を用いて比較を意識して音楽づくりを行ったことが大きな修正点である。
【國學院大學栃木短期大学人間教育学科子ども教育フィールド】
12 月 23 日（90 分）。短大生 21 名。
【新潟市立早通南小学校６年】
教科等横断型授業「みて，さわって，つくる　五感で感じる♯dokidoki♯縄文文化」
1 月中旬～2 月 1 日。小学校 6 年生 3 組計 95 名＋全校児童。共催：信濃川火焔街道連携協議会。担当：渡辺ゆみ子教諭（6 年学年主任、音楽科・家庭科担当）、清野大介教頭（体育科メインティーチャー）・田口真也教諭・斎藤和輝教諭（体育科 TT）、相澤裕子・村山明（新潟市文化財センター）、廣野耕造・立木宏明（新潟市文化スポーツ部歴史文化課・信濃川火焔街道連携協議会事務局）、佐藤信之（津南町教育委員会）。指導助言講師：伊野義博（新潟大学名誉教授）。土器借用協力：新潟市文化財センター・津南町教育委員会（農と縄文の実習館なじょもん）。教材協力：新潟市立早通南小学校教職員・國學院大學栃木短期大学。
　日本遺産〈「なんだ、コレは！」 信濃川流域の火焔型土器と雪国の文化〉として知られる独特の縄文文化が展開した地域での、教科等横断型・学年横断型の総合的な実践を企画した。約２週

間にわたり自然素材（音素材）と縄文風衣装を空教室で全校児童に開放し、慣れ親しんだなか、家庭科では「冬を明るく温かく」の単元の中で、雪国新潟での生活を縄文時代まで遡って考え、各班で縄文風衣装を製作した。体育科では表現運動の４コマの最後を縄文土器の製作工程をなぞる形で各班で身体を使った作品を製作した。最終的に、1 月 31 日に社会科の一環として、新潟市の縄文や世界遺産について新潟市文化財センター・日本遺産事務局職員より、また縄文土器について中村より解説し、文様施文体験を行った。2 月 1 日には、新潟市の土器と津南町の火焔型土器を比較し、オノマトペや図形楽譜などを介して土器を音楽で表現した。約半月にわたり複数の授業で取り上げたことにより「縄文」が強く印象付けられ、各教科で学ぶべき内容の学習効果の向上につながった。

（２）成果のまとめ

目的のバージョンアップ：研究当初は、学校教育を念頭に、社会科と音楽科のクロスカリキュラムとして実施した。その後、2019 年の國學院大學栃木短期大学内部での FD・SD 研修会での発表をきっかけに、都留覚（同大学准教授）より教示を得て、2021 年度からは「協働的・創造的な学習」を大きな目的に掲げることとした。これによって目指すものが明確になったのみならず、他の分野との連携も視野に入ることとなった。

博物館・遺跡公園での実践：2021 年度に初めて博物館（春日部市郷土資料館）での実践を行い、復元竪穴住居や生活の道具を学芸員の解説で学ぶことができた。同館では以後毎年継続して実践を行っている。その後、栃木市の星野遺跡、蓮田市の黒浜貝塚など地域を代表する遺跡での実践を行い、地域学習としての側面を強めることができた。

研究代表者・分担者以外による進行：当初、代表者と分担者が進行していた本プログラムであるが、事前検討を十分行うことで、外部の専門家や授業担当者が独自に進行することができるようになった。このことは、本プログラムがプロジェクトメンバー以外にも広がっていく可能性を示すものである。

体育科（表現運動）・家庭科（衣生活）との連携：2023 年度末に実施した新潟市立早通南小学校では、体育科・家庭科とも連携した教科等横断型授業を展開した。いずれも縄文文化をふまえて新たな「表現」を行うものである。体育科は別の教員が担当して実施したものであり、コンセプトの共有により、より広い意味での「表現活動」へとつながる可能性を示している。

（３）意義と今後の課題・展望

異分野のコラボレーションによる新たな価値の創出：考古学分野では音楽分野を含めて、「アート＆アーケオロジー」を標榜した公立博物館やアーティストグループによる展覧会が増加している。しかしながら、これらは考古学の成果を十分に取り入れているわけではなく、表面的な造形の面白さを利用している部分が大きい。真のコラボレーションには、本質な考え方の部分を共有することが必要と考える。〈縄文×音楽〉の効果を全体的に評価する方法については解決できていないが、近年、博物館の「癒し」効果や、考古資料に触れることによる幸福度増加という観点も提起されており、「学習」効果以外の効果を含めて、プログラムの評価方法についてはさらに検討が必要である。

土器・自然素材の実物にもとづく表現活動：本プログラムは、単に縄文のイメージを作品にするのではなく、土器や自然素材の実物を手にしてよく観察したり、どのような音が出るかを吟味する過程を重視している。アートと考古学の実践家である安芸早穂子氏からは、デジタル全盛の時代にこのアナログ感が素晴らしいとの評を得ているが、博物館の意義である本物のモノのもつ力は重要であり、その際には、専門家が撮り使い方や観察の着眼点、考古学的な解説を行うことで、より深い学びを得ることができる。今後は、本研究をケーススタディーとして「学術的成果をふまえた体験学習という分野」の活性化にも貢献可能である。また、音楽以外の表現活動への発展という点からは、美術科・体育科との関係、自然素材や食材を扱う点では理科や家庭科との関係性を構築できる可能性をもっており、今後の幅広い展開が可能である。今後は、総合的な学習の時間などを使った継続的な学習や、数回の連続講座、あるいは竪穴住居宿泊を伴う１日縄文体験などの中長期的なプログラムとの連携によって、より深い学びが可能となるかの検証を行いたい。

研究者－学校･地域博物館との連携の意義：本プログラムは高度な学術的内容を背景にしており、一般化した場合でも、学校現場と大学・博物館等の専門家との連携が不可欠である。児童・生徒には通常の授業とは異なるモチベーションの向上が期待でき、独自の役割を果たす。一方、専門家の補助として教員や学芸員を志望する学生が関わることで、養成課程教育の高度化にも直結する。また、資料や学術情報を提供する大学や博物館などの専門機関としても新たな情報発信が可能となる。本研究は現時点では教育学習プログラムとして位置づけているが、派生効果は大きい。本研究は主に児童・生徒を対象としているが、博物館や校外でのイベントでは保護者あるいは成人個人の生涯学習プログラムという側面も考慮している。例えば、一度本研究での土器文様の読み取りを体験すれば、他の博物館でも漫然と見るのではなく、資料の文様パターンを観察する視点を得ることができる。今後は、縄文ファンの大人や、アーティストを対象としたワークショップによって、それぞれの経験を活かした作品づくりを企画し、本プログラムの発展性を検証したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 中村耕作・早川冨美子	４．巻 57
２．論文標題 縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第６報）―中学校３年生総合的学習の時間における実践と課題―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 國學院大學栃木短期大学紀要	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 中村耕作・早川冨美子	４．巻 56
２．論文標題 縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第５報）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 國學院大學栃木短期大学紀要	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 中村耕作	４．巻 33
２．論文標題 大学による考古資料の3Dデータ化と公開・活用	５．発行年 2022年
３．雑誌名 奈良文化財研究所研究報告	６．最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 中村耕作・早川冨美子	４．巻 55
２．論文標題 縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第４報）　― 小学校全学年「表現活動交流会」の実践から ―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 國學院大學栃木短期大学紀要	６．最初と最後の頁 37-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中村耕作・早川冨美子
２．発表標題 博物館資料（縄文土器）を用いた音楽づくりの試み－考古学と音楽教育の連携２－
３．学会等名 日本音楽教育学会　第53回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 中村耕作・早川冨美子
２．発表標題 博物館資料をもとにした創作の可能性－〈縄文土器×音楽〉を通じた「協働的な学び」に向けて－
３．学会等名 全日本博物館学会　第48回研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 中村耕作・早川冨美子
２．発表標題 考古学と音楽教育の連携３－主体的・協働的な学びにむけて－
３．学会等名 考古学研究会　2022年度総会ポスター発表（オンライン）
４．発表年 2022年

１．発表者名 中村耕作・早川冨美子
２．発表標題 考古学と音楽教育の連携２－縄文土器の文様構造をもとにした音楽づくりの試み－
３．学会等名 考古学研究会　2021年度総会ポスター発表（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村耕作
２．発表標題 縄文土器から音楽をつくる
３．学会等名 第5回Online Art & Archaeology Forum（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 中村耕作・早川冨美子・渡辺ゆみ子
２．発表標題 考古学と音楽教育の連携3－縄文土器をもとにした音楽づくりを中心とした教科等横断型授業の試み－
３．学会等名 考古学研究会　2023年度総会ポスター発表
４．発表年 2024年

１．発表者名 中村耕作・早川冨美子・實松幸男・鬼塚知典・鈴木廣志・永田陽一・横山りつ子・小林美穂・永岡和香子・近藤真子・石井ゆきこ
２．発表標題 新しい価値の創出を目指した縄文土器を用いた協働的な音楽づくりの試み
３．学会等名 日本考古学協会第89回総会研究発表（ポスターセッション）
４．発表年 2023年

１．発表者名 早川冨美子・中村耕作
２．発表標題 古学と音楽教育の連携３－「教科教育法音楽」等の教科横断的な実践から－
３．学会等名 日本音楽教育学会　第54回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 中村耕作
２．発表標題 考古資料を通した社会連携・情報発信の可能性－音楽・美術・家庭分野や公民館との地域連携を視野に－
３．学会等名 栃木県域の歴史文化資料情報と多分野連携の可能性（人間文化研究機構「歴史文化史料保全の大学・共同利用基幹ネットワーク事業」歴博拠点研究会）（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

縄文土器文様を奏でる：考古学と音楽教育の協同による新感覚体験学習プログラムの創出 https://researchmap.jp/kousaku-n/jomon-music/ 中村耕作YouTubeチャンネル（実践動画） https://www.youtube.com/channel/UCKmATQg_0VUiZMi0Svm_yzA 栃木市平川遺跡土の土器（3Dモデル） https://sketchfab.com/kokutochi-sankokan/collections/7125d1184d2149efaf784795304a717d 埼玉県春日部市郷土資料館所蔵の縄文土器（3Dモデル） https://sketchfab.com/kokutochi-sankokan/collections/32d078b6b43e495da0b72ee632a2998d

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	早川　冨美子 (Hayakawa Fumiko) (20320632)	國學院大學栃木短期大学・その他部局等・教授 (42202)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関